

考古学的分類に関する一考察

—ひとつの記号学的見地からのアプローチ—

岩 田 安 之

1 はじめに

考古学で用いられる分類は分類学でいう類型分類が多い。中尾佐助氏によれば、「人間が頭脳によってやるいろいろのタイプの分類のやり方は、大分類として、類型分類、規格分類、系譜分類、動的分類」(中尾 1990:80)があるとする。類型分類とは、例えば考古学でいう、「形態で分類する」、「文様で分類する」などというさまざまな分類基準をその時々に応じて採用するという分類方法である。規格分類は数値による明確な分類で、考古学の分類例でいえば、器高が1mを超えたら大型、0.5~1mまでは中型、0.5m以下は小型とする分類である。系譜分類は、例えば生物の系統樹をつくりあげるという作業である。つまり、生物でいえば生物の過去の歴史の分類であるため、その正確な分類は最終的には一つである。動的分類とは、「同一事象を異なったシステムで独立して分類した結果を、総合的にまとめあげた分類というもの」(中尾 1990:320)である。考古学でいえば、多変量解析が動的分類の1種類とすることができる。

先にも述べたように類型分類の特徴は、その分類体系の中で基準の選択の自由が無制限であることである(中尾 1990:81)。よって考古学者が類型分類を行う場合、いかなる基準を選択するかが問題になる。つまり、分類基準が何かということをはっきりさせれば、分類を行った考古学者が何を目的に分類を行ったかが明らかになる。

しかし、誰にでも通用する客観的な分類基準など存在しない。上記でいう動的分類を使用し、考えられる限りのさまざまな遺跡、遺構、遺物の属性を取り上げて数量分析をし、類似性・相異性をとらえることができると反論する人はいるかもしれない。しかし、考えられる属性の数や質は人によって違うだろうし、分析後の類似性・相異性のくくり方も異なってくるであろう。

このように分類することは、個人個人のモノに対する認知レベルの問題に還元されるのである。ここにおいて、分類することは、分類したその人の世界観の表明なのである(池田 1992:94)。現在、通説として採用されている編年観などは、広く認められている分類の判断に過ぎない(E. H. カー 1962:14)。

上述の問題意識を受け、本稿では、①人間が分類を行う過程というものはどういうことかを少し考察し、②考古学分類を行うことの考察を少々してみたい。

2 分類すること

池田清彦氏はソシュール学者でもある丸山圭三郎氏の『文化のフェティシズム』という著書を引き、丸山氏の主張を次のようにまとめている。「コトバはあらかじめ存在しているモノに与えられた名称ではない。そもそもモノはあらかじめ存在などしていない。世界はコトバによって切り取られ、はじめてある同一性を与えられ、モノとしての存在を主張し始めるのである。ところが人はモノの存在を

絶対的なものとみなし、これを崇拜してやまない。これぞ根源的なフェティシズムである。」(池田 1992:14) 人間はコトバがあるからこそ、抽象概念をイメージすることができ、「非在の現前」(丸山 1984)を行うことができるのである。よって、分類するということは、非在している現象を基準によって現前化させ、我々が認識できるようにするという作業にほかならない。分類がコトバによって行われる限り、分類には常に恣意性がつきまとう。分類以前に存在するア・プリオリなモノなど存在せず、モノが意味をもつのは常に分類によって差異性、つまり二項対立的に相対的な価値が与えられたときであり、ア・ポステオリなものなのである。

分類することによって、現象は個人個人のオリジナルな知における世界観によって切り取られ、モノとして同一性を、相異性を与えられ、モノが何であるかの説明が可能になるのである。ここでいうオリジナルな知とは、個人個人が生きてきた過程で得てきたもの、つまりその地域、時代の人間のコードである。例えば、それは究極的にはコトバであり、ひいてはコトバによって概念化されたモノの見方ということができる。よって、分類することは存在させようとする現象としてのコトをあたかも存在しているようにみせることなのである。その際分類基準は、分類者のオリジナルな知から導き出されたものであるから、その基準を示すことは、その分類者がどのようにモノをみているかを表明する意味、また他者がそれを吟味する意味で重要である。

他者が、それはどのような基準であるのか、その基準を的確にとらえることができれば、その分類を行った者がどのような目的で分類を行ったかが理解されやすくなるであろう。

3 分類基準の重要性

分類のための基準がいかに重要かは何度も述べてきたことである。中尾氏の言葉を借りれば、「クライテリア¹⁾(分類基準)のシステムを変えれば、全植物を全く異なった分類体系で分類できる。(中略)分類は必要に応じて利用し、自分はまたおのれの独自の分類体系をつくり、それを駆使してみるべきであろう。それらの異なった分類体系は、何の支障もなく、共存できるはずである。現実問題としては、人間の数だけ異なった何かの分類体系が存在していると見た方がよいだろう。

一つの分類体系の中で、いろいろ論議が起こっていることが多いようである。その論議は、どうも分類基準の採否、その評価をめぐる起こっていることが多いようである。分類とその基準は二人三脚で走るのだから、片足である分類基準に問題が起これば、当然速く走れなくなるということになる。だからいかなる分類基準を選んで二人三脚の足を結び合わせるかは、非常に注意を払わねばならないわけである。」(中尾 1990:53)(下線筆者)。この「全植物」を「全遺跡、遺構、遺物」に置き換えてみると、この言葉が考古学にいかに関係かが理解されよう。

実際の分類を行う前に分類基準が属性の何を反映するのかをしっかりと検討して、分類するのが非常に重要である。大津忠彦氏の「古代東地中海沿岸地域における土器型式学—考古学的「器形」と文献史料に記された名称」(大津 1997)ではパレスティナでの例が示されている。しかし、この例がすべてに当てはまる訳ではないことを断っておく。

ランスは、「パレスティナのやきものの歴史を扱うとき、その専門家は、編年の範囲で次の5つの基準を基本的にもっている」(Lance 1981:43)としている。

①形(form)、②形の変異(form variant)、③装飾(decoration)、④胎土(ware)、⑤製作技術(manufacture)

(大津 1997の訳を踏襲した)。ランスは①から⑤までの基準で分類した結果は何を表すのかを次のように述べている。

①機能②時間③パレスティナ地域ではあまり重要ではない④技術の習熟度⑤製作技術の変化

これらの分類基準は地域をパレスティナに限定してはいるが、分類基準と分類結果の関係にある一定の判断を下している。この判断をもとに、他者が分類を行った場合に、その分類が満足いかなかった場合には、上記の分類基準に立ち戻って議論することが可能になる。例えば胎土で分類された結果は、産地を示している場合があるという批判が起こった場合には、④胎土で行った分類は④技術の習熟度を表すという分類結果を再考する必要があるだろう。

分類基準が生み出す分類結果を常に検討し、分類結果が満足いかなかった場合は分類基準の採否が妥当でなかったとフィードバックして検討することが必要である。分類基準と分類結果を何度か検討し、分類基準と分類結果が整合性をもった時に、理論的仮説が提示できるのである。

4 分類によって切り取られた変化、画期

属性というものは時間的流れのなかで欠落、追加、変容を繰り返していく。その変化の過程は革命的な社会変化が起こらない限り、ほとんどが漸次的なものであると推測される。考古学的に設定された型式が細分化されていくのは、漸次的変化の一部分を抜き出しているといえる。新たな土器型式が加えられるということは、漸次的な変化の一部分を抜き出しているということである。だが、漸次的な変化の中でも変換期というものがある。その変換期が我々のいう画期である。

その画期は当時の人々が設定したものではなく、あくまで我々が設定し、切り取ったものである。我々がいかなる分類基準を採り、分類したかによって、その画期も変化することに気を付けなければならない。分類基準と分類結果が妥当で、ある画期が見いだせるということは、やはり何らかの変化が当時の社会にあったということを指摘しているから、その画期の意味の考察が可能になる。ここにおいて、当時の社会復元という考古学の目的の一つを理論的に考察していくことが可能になる。

5 二項対立による理解

分類することとは究極的には二項対立でモノをとらえることである。人がモノに価値を見いだせるのはその差異性がそれぞれのオリジナルな知で確認できた時である。これは、人間がモノに差異を見いだす根本的な恣意性である。我々が、対象としている過去の人々にも当然モノをつくりだしている以上その差異を生じさせる恣意は存在している。我々考古学をやっている者が過去の差異を考えるにあたるにはどのような方法論があるであろうか。やはり、当時のコード（制度、約束事）を構造的に理解することである。上述したように、人間は究極的には二項対立でしかモノを理解することができないから、過去の人と我々がそのコードの違いを理解するには、究極的な人間の分類構造である二項対立から始めるしかないであろう。

ここでは、例えば中央と周縁という二項対立で縄文土器の型式を考察してみたい。例えば縄文時代の土器型式における中央とは一般的に保守的で変化に乏しいといえる。周縁は変化しやすいといえる。言い換えれば、中央の変化の乏しさというのは土器づくりの約束事がしっかりしているということであり、周縁ではその約束事が希薄になりがちであるということである。つまり中央では土器製作にお

けるコードが確実に規定されており、周縁ではコードは揺れ動いている。よって、型式どうしの接触から変化の起こり方とすれば、まず、周縁部分が変化し、中央は最後まで土器型式のコードを維持する、あるいはしようとする。具体的にいうと、中央はある程度漸次的に変化するが、周縁は約束事が揺らいでいるためにドラスティックに変化する場合が多いということである。このように考えると、揺らいでいない、あるいは変異の少ない土器変化のみられる時期、地域に上記の考えをあてはめて、いわゆる中央と設定できた土器が純粋な型式と設定できるのでないだろうか。そして、周縁での土器のまともは純粋な型式ではないにせよ、共時的変異、通時的変異の大きい型式と理解できる。ここにおいて、型式に中央と周縁という概念を適用させて、中央であるものを第一型式、周縁であるものを第二型式として理解したい。

ケーススタディとして、円筒式土器文化と大木式土器文化の中央とそれぞれの周縁ということが考えられると思う。筆者は、縄文土器については最近勉強し始めたばかりで、ここに縄文土器の例を提示するのは、先学者に対して大変恐縮であるが、筆者が感覚的に考えたことについて少し述べさせていただきたい。いわゆる縄文時代中期の東北地方北部、北海道南部に展開した円筒上層式と東北地方南部に展開した大木式土器の関係を円筒上層式の側から、中央と周縁の二項対立でみる。まず、青森県ではa～d式まで変化は漸次的である。秋田県も同様で、岩手はa、b式は漸次的変化、c、d式は大木式の文様が表現される。北海道南部でもa～d式までは漸次的変化であるが、d、e式で大木の文様が表現される。この上記に述べた両型式の関係は先学者がたびたび述べているし、両型式における定義設定の論争があることはいうまでもないが、中央と周縁という二項対立的に見方を変えた観点から、筆者の考えを述べさせていただくことをご容赦願いたい。現在の行政区分を用いるのは適切ではないし、しかも粗い見方であるが、中央は漸次的な変化の青森、秋田、周縁は影響されやすい岩手、北海道南部といえる。大木式土器が北進していったという見方で説明すると、北海道が青森より早く大木の影響を受けるというのは矛盾するかもしれないが、中央である地域では外部からの影響はあった場合でも、上述したようにコードが確定であるからそのコードが変容するまで時間がかかるということで説明ができる。大木式土器は北進したであろうが、中央であるコードが確定な青森地域では大木式土器は存在しても、円筒式土器に与える変化・影響は遅く、コードが揺らいでいる周縁である北海道南部地域では変化が早く起きたということである。このような中央(第一)型式と周縁(第二)型式が縄文時代を通じてあると考えられる。この方法は他の時代でも想定しうると考える。上記のケーススタディはあくまで浅学である筆者が感覚的に述べたもので、分析などもしていない。ここで強調したいのは、分類の最小単位である二項対立でモノをみるという視点、方法を強調したいということである。

そして同時に、すべての縄文土器の型式を同列に扱っていくことへの問題意識も提起したい。

6 おわりに

考古学という学問が分類に始まり、分類に終わると言っても過言ではないほど分類学に依拠している以上、その学問体系を深く考えていくことが肝要である。ただ何となく分類したというのではその分類が正しいのか、また分類の目的は何か、分類したことによってどんな結果が得られたのかなどの議論が始まらない。想像的理論を生み出し、その理論をテストするための分類基準の明確な分類をし、その結果が暫定的理論として成立した場合でも、他の批判的なテスト可能性をいつも持ち続ける過程

が重要なのである

批判的合理主義者の哲学者カール・ポパーは「アインシュタインは自らの理論について、ある出来事は必ず起こるが、別のことは起こり得ないと主張する。だからそれは、別の理論とは矛盾するので、もし起こればその理由の説明がつかず、理論が反証されることを認める仕組みになっている。」(関 1990:8) 科学的な理論というのは、どんな反証にも答えられる悪い意味で柔軟な理論ではなく、常に自らの理論を厳しいテストにかけられる用意があるものなのである。例えば、「明日は晴れるか曇るか雨が降るか雪が降るか」よりも「明日は雲一つない快晴」といった方がより厳密性が高く、反証される可能性も高い(関 1990:3)。科学的な理論とはこのようなもので、どうしてもとれるような理論は科学的ではない。

現在受け入れられている歴史観というものは、たまたま現在に適用されているだけであり、それが正しいとは限らない。我々の設定した時代区分は、時代と共に変化していくもので、現在設定されている歴史観は、我々の現在の社会をよく反映した歴史観である。例えば縄文時代と弥生時代というように、あたかも別の時代と設定されているが、他の分類基準を採った場合には双方の時代は同じ時代になってしまうかもしれないし、まったく別の歴史観がみえてくる可能性もある。そもそも縄文時代、弥生時代、古墳時代などという、～時代とは何であろう。原始、古代、中世、近世も同様に何であろう。これは当時の人が認識したものではなく、我々に広く共有、認識、判断された歴史観である。また、これらの歴史観は我々が作り上げた枠である。その枠のなかで議論はいつも起こっているように見える。そして、その枠を超える理論が生み出されたとき、構造の見方が転換され、いわゆるパラダイム転換という現象が起きるのである。

E. H. カーは、歴史を知るにはまず歴史家を研究せよと述べている(E. H. カー 1962:27)「歴史というのは、歴史家はその歴史を研究しているところの思想が歴史家の心のうちに再現したものである。(中略) 歴史家が何を捕らえるかは偶然にもよりますけれども、多くは彼が海のどの辺で釣りをするか、どんな釣道具を使うか—もちろん、この二つの要素は彼が捕らえようとする魚の種類によって決定されますが—によるのです。全体として、歴史家は、自分の好む事実を手に入れようとするものです。歴史とは解釈のことです。」

謝辞

以下の方々には貴重な御意見をいただき、貴重な文献を貸していただきました。末筆ながら感謝いたします。中村哲也氏。木村淳一氏。斉藤慶史氏。

註

- 1) 中尾佐助氏はいろいろなニュアンスを含めるためにクライテリオンという言葉を使用しているようであるが、本稿ではクライテリオンを基準と読み替えることにする(中尾 1990)。

引用・参考文献

- 池上嘉彦 1984『記号論への招待』岩波新書
池田清彦 1992『分類という思想』新潮選書

- 大川清・鈴木公雄・工藤善通1996『日本土器事典』雄山閣
- 大津忠彦 1997「古代東地中海沿岸地域における土器型式学—考古学的「器形」と文献史料に記された名称」『考古学雑誌』第82巻 第4号 59-77頁
- 大塚達朗 1996「(1) 土器—山内型式論の再検討より—」『考古学雑誌』第82巻 第2号 11-25頁
- 大村祐 1999「山内考古学の一側面—「山内考古学の見直し」に寄せて—」『考古学研究』第46巻第2号 112-122頁
- カー, E. H. 著 清水幾太郎 訳 1962『歴史とは何か』岩波新書
- クロード・レヴィ=ストロース著 荒川幾男・生松敬三・川田順造他共訳1972『構造人類学』みすず書房
- 小林達雄 2002『縄文土器の研究』学生社
- 小林行雄 1933a「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』第4巻 第8号 223-238頁
- 小林行雄 1933b「弥生式土器研究の前に—その説明に代えて—」『考古学』第4巻 第8号 239-242頁
- 坂本真弓 2002「大木系土器の受容傾向—円筒土器と大木系土器の相伴事例から—」『研究紀要』7号 青森県埋蔵文化財調査センター 29-39頁
- 鈴木克彦 1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター 1-56頁
- 設楽博己 1996「(1) 弥生時代の様式論」『考古学雑誌』第82巻 第2号 62-80頁
- 関雅美 1990『ポパーの科学論と社会論』勁草書房
- ジャック・ルゴフ他 二宮宏之編訳1999『歴史・文化・表象 アナール派と歴史人類学』岩波書店
- 高橋正勝1994「中期の土器 北海道南部の土器」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文時代の研究』4 雄山閣 10-20頁
- 茅野嘉雄 2002「いわゆる結節回転文から見た円筒下層a式について」『専修考古学』第9号 3-24頁
- ド・ソシュール, フェルディナン, 小林秀夫(訳)1995『一般言語学講義』岩波書店
- 中尾佐助 1990『分類の発想』朝日新聞社
- 中島皆夫 1994「小林行雄の様式認識過程」『考古学史研究』第3号 52-72頁
- 成田滋彦 2000「円筒上層式に於ける大木7b・8a式について」『村越潔先生古希記念論集』弘前大学教育学部考古学研究室08号 53-66頁
- 馬渡峻輔 1994『動物分類学の論理—多様性を認識する方法—』東京大学出版会
- ポパー哲学研究会2001『批判的合理主義—第1巻：基本的諸問題』未来社
- 丸山圭三郎1984『文化のフェティシズム』珪草書房
- 山内清男 1939「日本遠古之文化」佐藤達夫編1974『日本考古学選集21山内清男集』築地書館 所収
- 横山浩一1985「3 型式論」『岩波講座 日本考古学1 研究の方法』岩波書店43-78頁
- 脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子 編著1992『記号学小辞典』同学社
- Renfrew, C. and P. Bahn.
1991 *Archaeology, Theories Methods and Practice*. second edition, Thames and Hudson, New York.
- Lance, H. D.
1981 *The Old Testament and the Archaeologist*. Fortress Press, Philadelphia.